

書評 Arne Haugen, The Establishment of National Republics in Soviet Central Asia

著者	帯谷 知可
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	46
号	11/12
ページ	156-160
発行年	2005-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007520

Arne Haugen,

*The Establishment of
National Republics in
Soviet Central Asia.*

New York: Palgrave Macmillan, 2003,
x+276 pp.

おび や ち か
帯 谷 知 可

本書はソヴィエト中央アジアにおける民族共和国の成立、すなわち1920年代半ばにソ連体制下において行われた中央アジアの民族別国境画定（民族・共和国境界画定などとも呼ばれる：national delimitation）を中心的なテーマとするモノグラフである。このテーマを正面から取り上げた英語のモノグラフとしては初めてのものといえる。著者 Arne Haugen は、ノルウェーのベルゲン大学で初めて本格的な中央アジア研究を推進しようとした Alf Grannes と Odd-Bjørn Fure の薫陶を受けた研究者であり、現在はベルゲンの Stein Rokkan 社会学センター研究員を務めている。その博士論文が本書の下敷きとなっている。

本書のテーマである中央アジアの民族別国境画定は、中央アジアにソヴィエト体制の成立をもたらした1917年のロシア革命に次ぐ「第2の革命」とも呼ばれる、中央アジア史にとって画期的な出来事であった。ソヴィエト的な「民族」の資格づけのプロセス（また、ウズベクの例などでは名づけのプロセス）を経て、それまでのトルキスタン、ブハラ、ヒヴァ（ホラズム）、カザフ草原という歴史的な地理概念に基づいた区分にかわって、中央アジア史上初めてこの地に民族ごとの政治・行政区分がもたらされ、今日それぞれの基幹民族名を国名に冠する中央アジア諸国、すなわちウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン（キルギスタンまたはキルギ

ス）、タジキスタン、トルクメニスタンの原型ができあがったのである。

評者自身もこの民族別国境画定のプロセス（特にウズベキスタンの成立をめぐる諸側面）に少なからぬ関心をもってきたが [帯谷 1999 ; Obiya 2001], 民族別国境画定がもたらした、現代にまでその影響を色濃く残す具体的諸問題・諸矛盾は日本でも小松（1995 ; 1996）等により提示されてきた。中央アジアを統合するか分割するか、すなわち「中央アジア連邦」構想と民族別国境画定構想の相克をめぐる議論、ならびに民族別国境画定の結果としてのウズベク人の政治的勝利とタジク人の悲劇の対比が、日本でこのテーマが語られるときの関心の中心だったといえるだろう。中央アジアの人々自身の声としては、民族別国境画定の過程でほとんど発言のなかったタジク人の悲劇的立場を鮮明に描き出したマソフ（1991 ; 1995）、クルグズ（キルギス）人の立場からウズベキスタン、タジキスタン、クルグズスタンにまたがるフェルガナ盆地の国境画定に焦点を当てたコイチエフ（2001）等がこれまでに興味深い論考を著している。

本書の著者の問題意識は2つの視点からなる。ひとつはソヴィエト体制の中央＝モスクワからの視点、すなわちその民族政策の実態を中央アジアをケース・スタディとして明らかにしようとするものであり、ソヴィエト政権は、理論と現実の狭間で諸矛盾に直面しつつ、中央アジアでエスニックな、あるいはナショナルなアイデンティティを原理とする政治・行政単位をいかにして確立させていったのかという問いを設定している。もうひとつは中央アジアからの視点、すなわち民族別国境画定において中央アジア側の政治的アクターが果たした役割に向けられており、民族別国境画定は中央からの一方的な押し付けであったのか、それとも中央アジア出身の政治家たちにもそれに影響を及ぼす余地があったのかを明らかにし、それによって当時のアイデンティティのあり方や中央アジアにおける政治的な諸潮流なども視野に入れたうえで、中央アジアの民族別国境画定を歴史的・現代的文脈において評価しようとするものである。

このような関心のありようは日本におけるそれと基本的に共通するが、本書は、中央アジア全体を見渡しながらか、当時の民族別国境画定の具体化を委ねられたロシア共産党中央委員会中央アジア・ビューローの記録を主として、モスクワの諸アーカイヴ所蔵の一次資料を渉猟し、先行研究で提出されたさまざまな見解をそれらの一次資料に基づいて批判的に検討し、実証的な議論が組み立てられている点でオリジナリティを發揮している。

本書の章構成は以下のとおりである。

イントロダクション

第1章 ヒストリオグラフィ

第2章 伝統的アイデンティティ

第3章 変容するアイデンティティ

第4章 分割か統合か

第5章 民族と政治

第6章 集団アイデンティティにおける継続性と変化

第7章 「我々にも権利がある！」 分化のダイナミズム

第8章 国境線を引く

第9章 歴史が暗示すること / 結論

以下、これまで日本ではあまり議論されていないこのテーマに関連したトピックに言及している部分に重点を置きながら、簡単に内容を紹介します(丸数字は各章における節)。

問題意識と研究手法を述べたイントロダクションに続き、第1章はこのテーマに関連する背景として、マルクス主義・社会主義と民族の理論的側面、ソヴィエト民族政策、国境画定に対するソ連と西側の評価、国境画定とネップ(新経済政策)について、先行研究とその問題点を整理している。特に、農業集団化導入以前のネップ期(1921~29年)全般の時代性のなかに国境画定のプロセスを位置づけようとする試みは興味深い。

第2章(ウズベクか、タジクか、それともサル

トか、イスラーム・アイデンティティおよび地方アイデンティティ、部族集合体と血縁集団)、および第3章(ツァーリ体制下の中央アジア、ムスリムによる改革とジャディード、ジャディード、民族、政治、ナショナリズムと部族集合体)は、主に欧米の先行研究に依拠して、帝政ロシア支配下、ロシア革命期、ソヴィエト時代初期にかけての中央アジアの人々のアイデンティティとその変容について論じている。のちの国境画定において浮上する中央アジア各「民族」の「ナショナリズム」は、帝政ロシア支配末期の中央アジア・エリートらのアイデンティティのあり方にルーツがあるとの指摘が重要である。

本書全体を通して最も面白く読めるのが、第4章~第8章のアーカイヴ資料を駆使して議論が展開される部分である。第4章(万能の体制?、バスマチ運動、中央アジアの統合?、エスニック集団内分割)では、著者は、成立して間もないソヴィエト政権は中央アジアであらゆる政策を強制できるような万能の体制にはほど遠かったこと、中央アジアの側では中央アジアの統合というような構想にはほとんどリアリティがなかったことを提示しつつ、ソヴィエト政権にとって問題はフラグメントが寄せ集まったような形で住民が暮らす中央アジアをいかに効率よく統治するかにあったと論じている。

第5章(制度化された民族アイデンティティ、政治的言説の民族化、言語、現地化[コレニザーツィヤ]、民族の政治化)では、1920年代に入るとウズベク、カザフ、トルクメンといったアイデンティティが徐々に強まっていったことを背景に、「定住民/遊牧民」といった従来の対立項が次第に「ウズベク/カザフ」、「ウズベク/トルクメン」という形に収斂する政治的言説の「民族化」(nationalization)が生じ、その結果、政治単位としての「民族」、プラクティカル・カテゴリーとしての「民族」がソヴィエト政権のもとで浮上し、「民族」の「政治化」(politicization)が生じ、国境画定のプロセスにつながったとの論が展開される。国境画定は、ソ連の民族理論やイデオロギーに過度に引きずられずに、むしろ集団間の軋轢を防ぎつつソ

ヴィエト体制への支持をとりつけていくためのプラグマティックなアプローチととらえる視点が重要というのが著者の基本的立場である。ここでは特に、トルキスタン共和国（1918～24年）民族人民委員部の民族部門の区分けが国境画定のプロセスとの連続性をもつとの指摘は重要であろう。

第6章（遊牧人と定住民，民族と下位集団，サルトからウズベクへアイデンティティの変容か，新たなレッテルか，ウズベクとタジク，タジクの声の欠如，ウズベクからタジクへタジク・ナショナリズムの高揚，テュルク化と分離）は、日本の中央アジア研究においても関心の高い、「ウズベク／タジク」関係が中心である。この問題はウズベク・ヘゲモニーの勝利とタジクの悲劇といった図式でみられがちであるが、著者は、国境画定の段階ではタジク・エリートはやがて成立するウズベキスタンにおいて都市定住民としてのアイデンティティをウズベクと共有できると考えていたため声を上げる必要がなく、むしろ国境画定後のウズベキスタンでウズベク・ナショナリズムが明確にテュルク性を強調し始めたことへの反発によってペルシア性を主張するタジク・ナショナリズムが高揚し、ウズベキスタンからタジキスタンが分離するに至ったとしている。

第7章（3つの「主要民族」，クルグズ共和国，カラカルパク自治州）では、ソヴィエト政権が当初中央アジアの主要「民族」に想定していなかったクルグズおよびカラカルパク（現在はウズベキスタン内に自治共和国を形成）のナショナリズムがまさに国境画定のプロセスのダイナミズムのなかからマイノリティの声として浮上したことを指摘し、それを下から（中央アジア側から）の要請が国境画定に影響を与えた事例としている。

第8章（決定・センサス・統計，トルクメン共和国，フェルガナ盆地の分割，タシュケント市をめぐる闘争，タシュケント郡とミルザチュリ郡，ウズベクは恩恵にあやかっただけか？）では、実際に国境線を引く過程で中央アジア・ビューローおよび領域委員会において「民族」間の係争となった地域とそれをめぐる議論および解決の手段を検証

しながら、国境がそれぞれの状況において異なった原理によって画定されていったことが明らかにされる。そこでは、ある地域の住民の民族構成よりも、水利の確保など経済的な要因や、遊牧民にも中心「都市」がなければならぬというような行政的な便利さがしばしば優先された。さらに、国境画定が結果としてウズベク人とウズベキスタンに有利な形で行われたのは、いわゆるウズベク・ヘゲモニーの存在によるというよりは、モスクワにとって中央アジア統治の要として定住民を統合したソヴィエト・ウズベキスタン共和国を成立させることが国境画定の最重要課題であり、むしろ、国境画定以前のトルキスタン共和国とブハラ共和国（1920～24年）の対立などによって深刻に懸念されたように、ウズベク人が内部で分裂しないよう調整・介入した結果だとしている。全体として実際に国境線を引く作業は、「民族」の代表らの話し合いの結果を中央アジア・ビューローが承認し、モスクワにはかる、という形で行われ、それはコンセンサス・協力・妥協による政策決定というネップ期の特徴とも一致するとの見解が提示されている。

第9章（中央アジアにおける民族アイデンティティ？，民族，政治，ソ連崩壊，ポストソ連期の中央アジア）では、国境画定によって成立した共和国への帰属意識としての「民族」アイデンティティが、結局のところソ連時代から現代に至るまで、国境画定以前の歴史的なアイデンティティに完全にとって代わることはなく、限定的なものに留まった点が指摘されている。そして、著者は予期せぬソ連崩壊と中央アジア諸国の独立がもたらしたネイション・ビルディングの困難さ、とりわけソ連の領域全体を視野に入れた経済分業を前提とした線引きによって成立した中央アジア諸国が、ソ連という傘を失って現在直面する経済的困難に対する悲観を吐露して論を閉じている。

本書は全体としてバランスのとれた良書であるといえ、中央アジアの民族別国境画定に関する概説と

して広く長く読まれるにふさわしいのではないだろうか。本書の成果をまとめるならば、しばしば欧米の研究に（また、現代のウズベキスタンにおける独立後の新しい正史などにも）みられるような、「分割して支配せよ」のパラダイムによる分析方法を退けつつ、中央アジアにおける民族共和国の成立をソ連における中央集権化および社会主義的近代化を達成するためのプロセスと位置づけ、国境画定は基本的に中央アジアの「民族」エリート間の議論と交渉の結果であること、限定的ながら中央アジア側からのイニシアティブがプロセスに影響を与えることもあったこと、また民族共和国の成立はモスクワからの一方的な押し付けではなく、これまで考えられてきた以上に中央アジアの歴史的・社会的現実を反映したものであったことなどが明らかにされたことである。

本書を読了してみると、評者自身も含めたこのテーマに関する先行研究が後知恵的な思考にとらわれ過ぎていたのかもしれないとの感想をもった。例えば、このテーマを扱うにあたって、ソ連の民族理論の存在が第1の前提とされがちであり、行政および経済的な効率の問題にはあまり目が向けられてこなかったが、当時の「現場」ではむしろそれらのほうが重視されていたとの指摘は新鮮であった。また、タジク人がいつから「民族」として声を上げるようになったのかについての分析も、私たちが現代のいわゆるタジク・ナショナリストの言説にとらわれ過ぎていたのではないかとこの反省を促すものであるように思われる。

もちろん、さらに詳細に検討されるべきいくつかの問題はある。例えば、著者が国境画定における「鍵」とも呼ぶ、ウズベク共和国の成立について、そもそもテュルク系の定住民を統合した「民族」としての「ウズベク」はいつ、どのように、どこで浮上したのか、それが国境画定のプロセスにおける言わずもがなの前提となったのはいつ、どこでのことなのか、といった点である。また、国境画定後の民族共和国への帰属としての「民族」アイデンティティが限定的なものに留まったとの結論はやや性急な感があり、さらに例証を加えることが必要だろう。

さらに、個々のテーマが論じられる際に地域的な偏りがあること（例えば、バスマチ運動に言及した箇所ではフェルガナには言及していないことなど）が若干気になった。著者の今後の研究の方向性についてはわからないが、このテーマをさらに掘り下げるとすれば、本書ではほとんど使われていない中央アジアの現地諸語の一次資料の渉猟にひとつの可能性があるだろう。

惜しむらくは、地図、図版、イラストの類がひとつもないことである。国境画定というテーマからして地図はぜひともあったほうが読者にはありがたい。

最後に、非常に多くの文献を網羅しているながら日本の中央アジア研究者の業績がひとつも利用されていないことは残念である。翻っていえば、日本の中央アジア研究ももっと英語で発信すべきだということだろう。

文献リスト

<日本語文献>

- 帯谷知可 1999. 「ファイズラ・ホジャエフとその時代」『岩波講座世界歴史23 アジアとヨーロッパ 1900年代～20年代』岩波書店 207-230.
- 小松久男 1995. 「2つの都市のタジク人 中央アジアの民族間関係」原暉之・山内昌之編『講座スラブの歴史2 スラブの民族』弘文堂 250-274.
1996. 『革命の中央アジア あるジャディードの肖像』東京大学出版会.

<外国語文献>

2001. [ウチクン]
- (1924-1927 [フェルガナ盆地における民族・領域境界画定1924-1927年] : [ウチクン]
1991. [粗野な分割の歴史] : [イルフォン]
1995. : 《 [タジク人 「極秘」印の歴史] : [文化遺産出版センター]

Obiya, Chika 2001. "When Faizulla Khojaev Decided to Be an Uzbek." In *Islam and Politics in Russia and Central Asia: Early Eighteenth to Late Twentieth Centuries*. eds. H. Komatsu and

Dudoignon S., 99-118. London: Kegan Paul Internaitonal.

(国立民族学博物館 ・ 地域研究企画交流センター
助教授)